

アルバイター

紺色の学生服は

そのままに

上から社名の入ったエプロンをして

ショッピングカートを片付けている

少女。

客が

さつきまで重宝に使っていたそれを

邪魔者扱いに放り投げて

笑顔で受けとめた

少女。

その笑顔に 僕は

何とも言いがたいものを感じた

僕や そして

多くの人たちが

初めて社会へ出た時

先に居る者達に

自分たちの居場所がなくなってゆくことを 感じさせながらも

やがて

色褪せてしまったように

持ち合わせてきた

それを、

夢や希望を

憧れや哀愁に変えてしまうな

僕のような卑怯者になるな

君や

君達は

いつか過ぎ去っていった

僕達そのものだから

かつての僕や

僕達の

分身でもあるのだから